

ガンバろう東日本 ガンバろう日本



絆

想像を絶する震災地にシヨツク！ 現地で震災復興支援に参加

(七月二十五～二十九日、宮城県)

J Aグループ広島東日本大震災復興・再建対策本部(村上光雄本部長)は、J Aグループ広島東日本大震災たすけあい運動の一環として、現地ニーズに沿った支援隊を編成し、六月二十日から三班に分かれて被災県の復旧・復興支援を行った。広酪からは寺道弘生所長(西部事業所・写真前列右端)と加藤祐一技師(東部事業所・上記写真三列目右端)二名の職員派遣を決定し、二名は広酪を代表して第三班として七月二十五日(月)から二十九日(金)、他のJ A職員と共に宮城県での支援活動を行なった。

■組合代表として熱い思いを胸に！

七月二十五日、第三班として召集されたJ A尾道・J A三原・J A福山・J A三次・J A庄原・中央会・広酪の派遣員十九名が広島空港に集合。結団式を行い、それぞれの思いを胸に現地に飛んだ。現地到着後、東日本大震災J Aグループ支援隊として全国から集まった百二名(愛知・岐阜・鳥

取・広島・熊本・埼玉・鹿児島・全国連)の有志と合流。
J Aグループ宮城災害復興本部の中心人物として、坪総務部次長(J A宮城中央会)から「大震災で大きな津波が発生しJ A会員の多くの圃場が津波で被災した。会員は落胆し今後の生産意欲を大きく落としていた。皆さんの支援を受けて復興・復興を目指したい」と要望した。

■10mを超える津波！ 二次災害を防ぎ、細心の注意をもって支援！



(現地オリエンテーションの様子)

尾本宮農農政部長(J A宮城中央会)から、東日本大震災の概要と被害状況の報告を受け、「三月十一日の地震による津波の第一波は三十cm程度の津波であったが、その後の第二波は十mを超える大きな津波が発生し、県内全耕作面積の約一割が被害を受けた。その後余震が続き、四月七日には震度五で建物の倒壊も多くあり、更に七月

二十四日にも震度五の余震が発生した。作業にあたっては水分補給と些細な傷等があった場合は破傷風の感染も予想され、速やかな報告と救急処置を行うようにと注意を受けた。

■初日
JAみやぎ亘理で
イチゴ農家を支援

支援隊は、JAみやぎ亘理に到着。

岩佐組合長ら幹部の出迎えを受けた。岩佐会長から「管内では水稻はもとよりイチゴ栽培が盛んで年間四十億の売上がある。今回の津波では仙台東部道路が防波堤となり、海に面したイチゴ栽培農家の内、約九十五%が大きな被害を受けた。被災農家は再建するため内陸部に農用地を確保し、イチゴの苗の定植をはじめた。今回の支援隊には、八月中旬の苗の定植に向けた新たな圃場整備をお願いしたい」と支援を求められた。

支援隊は福島原発から約五十kmに位置するイチゴ造成地(五・四ha)に赴き、主に造成された圃場の支援で、ハウスの組み立てや竹・桑の根の撤去にある



(竹や桑の木の根を手作業で掘り起こす隊員)

たった。現地作業は炎天下と砂ぼこりの重労働ではあったが、怪我もなく順調に終了した。

■二日目
想像を絶する現場体験。
悪臭・わきあがるハエ・
地盤のぬかるみ
直ぐ側では遺体捜索も

二日目は石巻災害ボランティアセンターの事務局・専修大学でボランティア登録を済ませた。これはボランティアと偽って盗難を凶る心無い者がいるため登録証を作業服に貼り付けるこ

とが義務づけられている。作業地は河口より約1kmの地点で、津波が入った圃場の瓦礫撤去作業を行った。

前方の圃場では警察の遺体捜索が行われており、捜索が終了した圃場のみ立ち入ることができ、瓦礫の多くはじゅうたんやシート・流木で、悪臭、ハエの発生や汚泥等で地面はぬかるみ、炎天下の作業で体力の消耗は激しかった。圃場近くでは牛舎の被災も見られ、酪農家若しくは肥育農家であるかは確認できなかった。作業終了後、沿岸部を経由し被災地を視察したが、直接、被災地を見るとテレビ画像より遙かに壮絶なもので、なんとも言いようの無い強い悪臭もあった。



(ぬかるみの中でがれき撤去を行う加藤技師：左から二人目)



(作業隣接地では警察による遺体捜索が未だ行われる現実を目の辺りにする)

■最終日 J Aみやぎ亘理 復興への兆しを見た！

最終日は初日同様にイチゴハウス建設地のゴミ撤去作業にあたった。支援隊員の疲労も極限状態であった。この日、作業は午後三時に終了し、前日同様亘理町沿岸部を視察した。石巻同様に壮絶な風景を目にしたが、一方で復興に向けた作業は着々と進んでいることを実感した。支援活動終了後、岩佐組合長から「イチゴハウスの造成にあつては生産者の後押しで大きな決断が出来た。被災後、農家は呆然としていたが、時が経つにつれて生産者か



(流れてきた圃場のがれきを人力で撤去)

ら「組合長、何を悩んでいるのか。私たちはやるよ!」との決断をきっかけに、全国のJAグループからの支援を受け、再建に向けて意欲の高まりに拍車がかかった。今回の支援活動に感謝する」と謝辞が述べられた。



(道路沿いに集められたがれきの山)



(ぬかるみでの作業は隊員の体力を奪った。埋もれたじゅうたんを撤去)



(手作業で流木等を掘り起す撤去作業。中央は集められた流木の山)

■支援活動から学ぶ 組織活動

今回の支援隊に参加し被災地の復旧・復興にあたる事が出来たことは素晴らしい経験であった。現地の要望に応え、心情を察知し支援することは、広酪の組織活動においても同様で、組合員の意見・要望に応えることに重なる。今回の支援活動における貴重な経験から、今後の組織活動に向けたヒントを得たような気がした。東日本大震災で被害を受けられた方が一日も早く再建できますよう祈念します。

(寺道弘生・加藤祐一)

日々徒然 かがやき



▼東日本大震災の発生から既に六ヶ月が経過した。しかし、依然として、福島第一原発事故の収束には程遠い状況が続く。加えて、次々と日本の食の安全・安心を揺るがす事態が発生している。当初、問題となった生乳や野菜・コメだけでなく、今度は国の暫定基準値を超える放射性セシウムに汚染された可能性がある牛肉がほぼ全国に流通する事態を招いた。国の肉牛出荷停止の指示は、福島県、宮城県、岩手県、栃木県と相次ぎ、全国の各自治体では出荷検査等が検討され大きな波紋を招いている。こうしたことから、テレビでは、これまで築いてきた日本食品の「国産」の安全性が崩れ、オーストラリアや米国牛肉を買い求める消費者の姿が報道された。

▼消費者は、その原因となる畜産農家らが「なぜ屋外にあった稲わらを給与してしまったのか」と畜産農家のモラルと国産の安全性を疑い、国内農産物が敬遠される事態を招いた。我々、畜産農家からすれば我が子同然の牛達がやせ細っている姿をみれば、当然エサを腹いっぱい与えてやりたいと思うのは至極当然で、心情は理解できる。一方で、遠路離



監事の職責と義務を改めて認識 効率的監査を目指し林監事のコンプラ伝達研修

池田道明代表監事は、監事四名の出席のもと第二回監事会を開催した。協議にあたっては、七月二十日から二十二日の間、林智行監事が出席した全国JA新任常勤監事研修会でのコンプライアンス伝達研修を行い、監事の役割、職責や義務を再確認するとともに、監査を行う上での基本や進め方などを研修した。これら内容を鑑み、

- ①平成二十三年度監査方針等の策定
- ②上期決算監査に伴う監事対応
- ③監事定数
- ④内部監査との連携等を協議した。



(研修報告を行う林監事)

れた静岡県の茶葉から放射性物質が検出されたニュースを見れば、屋外にある稲わらを給与すれば内部被爆の可能性も推測できるのではないかとも思う。現地の混乱する情勢下と詳しい状況が分からない中で、疑問点が幾つか残る。

▼国の法律やガイドライン、補助事業の新設又は改正が毎年のように行われる。しかし、それら法律を知らなかったとしてこの責任を免れることは出来ない。これらの情勢変化にはしっかりとアンテナを張って個々に情報収集する構えも重要と考える。

▼今回の原発事故を受けて、国は現地の稲わらの収穫時期の把握が出来ておらず、地元行政もその屋外放置の稲わら給与を禁止する指導徹底の不手際を陳謝した。地元行政と国との情報収集や連携にも疑問が残る。

▼県内でも口蹄疫や感染性疾患などが発生した場合の防疫体制、緊急事態には国、県、市町、行政と連携した初動対応が重要となる。組合員は日々変化する情勢に対して、行政から発せられる通達等に対して自らも情報収集に努めることが肝要である。組合としても日頃からの行政との情報共有をもって、緊急時に連携した体制整備が図られるよう備えることが重要と考える。

美湯
仙人